

国際林業協力の理解の輪を広げよう

秋 山 智 英

国際協力事業を一つの衣にたとえると、政府の ODA 予算で行う国際協力事業を縦糸とすれば、NGO（非政府機関）の行う協力事業は、いわば横糸といってよい。この縦と横の糸がよく調和がとれ、美しくあやなすと、立派な国際協力事業という衣ができあがるのではないか。少なくとも国民に充分に理解される国際協力事業となるのではないかと思う。

日本のこれまでの国際協力事業は、その多くが ODA 予算によるものであったといってもよく、NGO によるものは少ない。少なくとも林業関係については、そのように言っても過言ではあるまい。今後、国際林業協力事業を、より積極的に、より効果的に推進していくためには、広く国民の皆さんに国際林業協力の重要性について理解を深めた上で、ODA 予算の拡充強化を図るとともに、NGO の行う林業開発協力事業についても、積極的に専門家の派遣などの支援をするとか、その普及、啓発活動に一層力を注いでいくことが大切であろう。

私は、昨年 1 月、海外林業コンサルタンツ協会に籍をおくようになってから、いろいろの会合において、国際林業協力事業について、国民の皆さんがどの程度理解しているかを知るため、尋ねてみることにしている。ところが、殆んどの人々は、マスコミの影響からであろう、日本の商社が熱帯林を伐り荒らしていることを齊しく指摘するが、国際林業協力事業については、全く知っていないというのが実態である。最近では、地球環境保全と熱帯林問題が巷間で語られ、熱帯林の重要性についての認識が深まりつつあるが、それでも日本の森林官が熱帯地域で、森林造成に汗を流している事実について知っている人々は、残念ながら少ない。これでは、NGO による林業開発協力事業を推進しようと提唱しても馬の耳に念佛である。まずは林業協力の実態について、多くの人々に現地で見ってもらうことが先決であろう。PR 活動も大切であるが、百聞は一見にしかずである。

海外林業コンサルタンツ協会は、このような見地から、昨年来、民間による植林ツアーに対して積極的に協力し、国際林業協力について、国民の理解を深めることに努めているところである。

これから述べようとしている二つの植林ツアーは、私が団長として昨年実施したものである。その第一は、横浜市海外交流協会等が企画し、実施した「グリーン・タン

AKIYAMA, Tomohide: Better Understanding for the International Forestry Cooperation
海外林業コンサルタンツ協会

ザニア '90」と呼ばれる植林ツアーであり、第二は、当協会が企画し、日本交通公社が実施した「マレーシアへの植林の旅」である。いずれも植林をしながら友好親善の役目を果たし、また、団員齊しく日本の国際林業協力への理解を深めて無事帰国したツアーであるので紀行文風にとりまとめて紹介する。

1. 『グリーン・タンザニア '90』植林の旅

アラブ首長国連邦のアブダビ空港を飛びたち、ケニアのナイロビに向かう飛行機の窓から見える光景は、いけども、いけども果てしない赤い大地で、緑の木や草が全くない。干上がった川の跡が赤い大地のあちこちにうねっているが、生物のかけらも見あたらない。文字通りの死の大地である。山紫水明の国日本の景観を見慣れた目には、異様としか映らない光景だ。これが地球砂漠化の実態である。

今日、地球上の森林の約5割を占める熱帯林は、破局的な森林破壊が続けられており、毎年1,000万 ha 以上の森林が消えている。このアフリカにおいても、毎年230万～250万 ha の森林が消え、サバンナ化されたり、荒地地化され、更に、その一部が救いようのない砂漠（化）へと変貌している。

このような状態が続くと、いずれ将来は、人類の生存そのものにも重大な影響を及ぼすものと憂慮されている。今こそ、地球上のすべての人々が自然との調和を大切に、失なわれた緑を復元させるべく懸命の努力をすべきときである。

私は、昨年2月、「地球の砂漠化を防ぎ、環境保全に努めよう」という趣旨に賛同して「グリーン・タンザニア '90」に参加した植林使節団一行41名の団長として、タンザニアを訪れ、美しい山容を誇るキリマンジャロ山の雄大な山麓で、現地のマサイ族、チャガ族の皆さんと共に、荒れた土地に鋤をふるい、一緒に汗を流して植林するとともに、歌や踊りの文化交流も深めて、日・タ友好親善の旅をしてきた。

タンザニアは、赤道の南、インド洋に面した南半球の国で、森林面積は国土面積の約半分にあたる4,200万 ha あるが、その多くがサバンナ化しており、しかも、毎年40万 ha 程度の森林が消滅している。その原因は、世界各地における森林消滅の原因と同様であり、過度の焼畑移動耕作、過放牧、薪炭材の過伐、農地への転用などがあげられている。しかし、その背景には、人口の急増、貧困層の増加による食糧、飼料、燃料の不足があるだけに、その対策は、なかなかむずかしい側面をもっている。

タンザニア政府は、いかなる原因、理由にせよ、一度緑が失なわれ、生態系のバランスが崩れると砂漠化の波は、ここにもおしよせるとの判断にそって、海外からの援助を仰ぎながら「Misitu Ni Uhai」（「森は生命」=スワヒリ語）を合言葉にして緑を守る運動を展開している。

われわれ植林使節団が植林したところは、雄峯キリマンジャロ山の山麓のハイ県のマサイ族等の住むナイビリエ村の広漠たる裸地であった。マサイ族は、定住生活を拒み、遊牧しながら孤高な生き方をしており、かつては、イギリス人からも恐れられていた部族として知られている。エンベレと呼ばれる長槍を片手に、素肌に赤茶の布を纏い、小高い丘にたたずむ姿は、正に“草原の古武士”といった風情がある。それだ

けに、自分のテリトリーを縮小するような植林には反対するのではないかという懸念が、常にわれわれ使節団一行の脳裏から離れなかった。

現地につくと、素肌に赤茶の布をまったり、耳たぶに大きな穴をあけた大勢のマサイ族の皆さんの大歓迎をうけ、それまで抱きつづけた懸念は一切ふっとんでしまった。マサイ族、チャガ族の皆さんとすぐ打ち解けて仲よく、三人一組のグループに分かれ、共同での植林作業に入っていた。言葉は通じないが、植林をする呼吸はピッタリである。

あまりにも順調すぎるので、ナイビリエ村のモレル村長さんにそのわけを尋ねると、「本来、マサイ族には植林するという習慣はないが、このハイ県だけは例外。ここでは植林の効用は知っており、長老たちが植林地の新芽を牛に食べられないように指導している程だ」という。このような地元の協力があればこそ、植林プロジェクトも軌道に乗ってきたのであろう。しかし、その蔭には、日本の林野庁から森林専門家として派遣されていた瀬川宗生氏のなみなみならない努力があることが直ぐに判明した。彼は、スワヒリ語を自由に駆使し、マサイの人々の生活に溶け込みながら、森林の効用を説き、植林の必要性を語り、地元の皆さんが喜んで植林に従事するように指導してきたのだ。このような努力があってこそ、植林使節団一行が地元のマサイ族の皆さんと和気藹々^{わきあいあい}のうちに共同で植林ができたのである。

マサイ族の皆さんが「セガワサン」「セガワサン」とかわるがわる瀬川森林官に問いかける姿に、使節団一行は驚きの眼をむけるとともに、問わず語らずの中で、瀬川さんの信望の厚さに敬服し、日本からはるばる独りでタンザニアに来て、森林造成に黙々として努力している若い森林官のひたむきな姿に只々賛辞を贈るのであった。「団長、日本の森林官は立派ですね、マサイの皆さんが慕っていますよ」「住民の皆さんにすっかり溶け込み、信頼されているからこのようなプロジェクトが成功するのですねえ」とかわるがわる話しかけてくる。うれしい限りであった。

和気藹々^{わきあいあい}のうちに植えられた苗木の数は千本程度であるが、この事業を通じて日・タ両国の人々の心に植えつけられた友好という名の樹木は、年と共に大きくなり、将来両国の強い絆となるであろう。

植林使節団に参加した人々は、主として横浜市等に住む、18才から60才にいたる男女それぞれ20名で、植林については初体験の人が多かった。それだけに、その印象は強烈であった模様だ。「人から聞いた話や、ある一方的視点からされている報道よりも、自分の目で見、体験することがどんなに貴重であるかを知った」「私たちのこの体験を日本で多くの人々に伝えていくことが大切だ」というような言葉が、特に若い男女の人々から聞かれたのが印象的であった。

植林が終ると交流会が始まった。見事なハーモニー、美しい歌声、ナイビリエ村小学校の生徒による「森を自分達の手で守っていく」という題のコーラスによって幕が開く。次々と披露される民族舞踊。その輪の中に使節団の若い男女が飛び入り参加をする。また、今度は逆に日本側の踊る炭坑節に、マサイやチャガの人々が加わる。これが友好親善の輪というものであろう。皆が歓喜している。延々と3〜4時間にも及

ぶ交流会は、民間のボランティア活動なるが故にできるものだろう。

終りに「我々が日本に行くことは難しい。だからまた、一緒に木を植え、歌い、語らうために、この地を訪れて下さい」と言われたタンザニア要人の言葉が、この交流会をしめくくった。

今回のタンザニア植林ツアーは、官民一体となった計画、準備、実行によって成功したものといってよい。

本年も「グリーン・タンザニア '91」が実施される予定であったが、残念ながら中東戦争の影響で中止されてしまった。今年からは、アルーシャ州、サメ地区で林業協力プロジェクトが開始されたのであるから、明年からは是非とも植林の旅を再開され、林業協力プロジェクトの実際を視察して、その理解を深めてほしいものである。

2. マレーシアへの植林の旅

成田空港を飛びたって約6時間、遙か洋上にそそり立つ^{がが}巖々たる秀峰が視界に入ってくる。この山がサバ州の人々に「アキナバル」（死者の聖地）として崇められている東南アジアの最高峰キナバル山（4,101 m）の英姿である。この秀峰はわれわれに、間もなく東マレーシアの玄関、コタキナバル空港に到着することを教えてくれる。

東マレーシアはサバとサラワクの2州からなり、面積は約2,000万 ha、ボルネオ島の北部を占めており、南はインドネシア領のカリマンタンに接し、またこの2州の間には、良質の石油を生産することで有名な、小さな独立国ブルネイが介在している。

この東マレーシアの魅力は、何といってもキナバル山を頂点とする人跡未踏の熱帯多雨林の雄大な大自然である。ここの熱帯多雨林は、世界で最も複雑な自然生態系をもっていることで有名であり、そこには約2,500種の木本植物のほかに、約600種の鳥類、200種以上の^{ほにゆう}哺乳動物、約200種のは虫類、数千種の昆虫類が生息しているといわれている。正に野鳥、動植物の宝庫であって、世界の自然科学者や自然愛好家の人気を集めている。

私は、昨年11月「マレーシア植林の旅」一行47名の団長として、再び、サバ州を訪れる機会をもった。神秘的な美しさをもつキナバル山を目のあたりにして、十数年前にここの熱帯多雨林の美しさに、一種の感動を覚えながら、森林調査をした懐しい思い出が心によみがえってきた。しかし、コタキナバル空港に近づき周辺の山なみを望見すると、往時の面影はなく、いたずらに焼畑移動耕作によって伐り荒らされた山腹や開発によって疎林化した林相が次々に視界に入ってきて、「熱帯雨林も伐り荒らされたものだなあ」という何ともいいようのない、せつない思いが胸をついた。

この度の「植林の旅」は、最近熱帯林が世界各地で急速に減少してきており、このまま推移すると、将来人類の生存そのものにも重大な影響を及ぼすものと憂慮されている現状を踏まえて、地球環境の保全に関心をもち、失われた緑の復元に積極的に行動を起こそうとする林業関係者の人々に呼びかけた植林の旅であり、また、サバ州において、森林復元に努力している日本の森林官の活躍振りを広く認識してもらおうと、海外林業コンサルタンツ協会が企画したものであった。幸い賛同者が多く、北は

北海道から南は鹿児島まで、全国各地から有志が続々参加され、47名に及ぶ植林使節団となったのである。

サバ州は、わが国に対する南洋材の重要な供給地であり、州財政の60%が木材関連産業に依存している程、森林、林業の経済的地位は高い。しかし、近年、商業的伐採や大規模農園の造成、非法な焼畑移動耕作などによって、森林の破壊が大きな問題となってきた。



記念植林の現場にて——
SAFODA 副総裁ベンジャミン氏とともに

そこで、サバ州政府は、まず、失なわれた緑を復元するため、1976年に森林開発公社（SAFODA）を設立して、農業放棄地や焼畑移動耕作地跡などの森林復元に乗り出したのである。そして、その一環としてわが国に技術協力を求めてきた。わが国は、この要請にこたえて1986年以来、林業技術協力を進めてきている経緯がある。現在も日本の林野庁から国井忠氏（プロジェクトリーダー）をはじめ5名の森林官が現地に赴いて、サバ州の森林官と共に、緑の復元のために活躍している。

この度の「植林の旅」の記念植栽地は、コタキナバル市の南方約25 kmにあるキナルート。ここ一帯約500 haは、かつてゴム園であったが、廃園となり、そのまま放置されてきた荒地である。そこで、ここを拠点として、1987年以来、「サバ州造林技術開発訓練計画」という林業技術協力プロジェクトが開始され、現在、技術者の養成や緑化事業が進められているところである。

記念植樹祭の11月13日、朝起きると雨であった。私は、山に行くとき雨に降られたことがない天気男の筈である。「サバは今、雨季だからやむを得ない」という慰さめの言葉も何となく空々しい感じがする。何とかなるであろうと話合いながら二台のバスに分乗してキナルートに向う。1時間足らずでキナルートに着く。国井リーダーはじめ、山下、久慈、中村、飛高の各氏が、われわれのために万事万端の準備をしてくれていた。会場には、大きなテントが張られ、チームリーダー以下SAFODAの職員とみられる大勢の若い男女の出迎えを受ける。活気が研修訓練所に満ちている。業務が順調に進展している証拠だと、その雰囲気が教えてくれる。

国井リーダーが、「あと一時間もすれば雨はやみますよ」と力強い宣言。一同ホッとす。SAFODAの議長、モレシャルさん、総裁のヤップさん、日本の領事の今村さん等来賓が次々と来られ、セレモニー開始となった。

セレモニーが終ろうとする頃となると、国井リーダーの予言通り雨がやんだ。三々五々、車に分乗して植栽現地に赴く。周辺の山々は若い緑に蔽われつつある。すべてアカシアマンギウムというマメ科の樹木である。3年生で10 mに達するという早生

樹種。荒けずりの林道は、雨後のため砂塵も立たず快調だ。現地につくと「WELCOME to SAFODA—JICA MEMORIAL PLANTATION」と記した大きな看板が目に入る。地元の人々や若い男女が約100名、お揃いのTシャツ姿で待機。胸のマークは山火事防止である。進入禁止の標識に似たデザインで「山火事ノー」を訴えている。国井リーダー苦心の作による火事防止のキャンペーンである。ここでは、毎年山火事が発生して、折角植林して育てている森林が、一瞬にして灰燼に帰するという苦い経験が幾度となく起きている。それだけに山火事は恐るべき敵なのである。それも乾季における焼畑農業がその元凶であるだけに、参加者の切なる願いが込められているようだ。

記念植林は、参加者全員が共同で、お互に鍬を振り、苗木を分けあって一緒に植え付ける。心と心が触れあっているためだろうか、共同作業に言葉の違いが全く苦にならない。呼吸もピッタリするから不思議である。文字通り、日・マ友好親善の記念植樹祭となった。植えた苗木は、僅か千本程度の少ない数であったが、お互の心に植えつけられた「日・マ友好親善」という記念樹は、年と共に大きく育っていくことだろう。三年たって木が大きくなったら、また見に来てくれ」という言葉が思わず飛び出すほど、心がうちつけた記念植林となった。

1時間程で植林作業は終り、再びセレモニー会場に戻る。テント張りの中での昼食会である。魚の丸煮や焼肉など、地元の人達の手づくりのマレーシア料理が御馳走である。お互に舌鼓みを打ちながら頂く。一汗かいた後の食事だけに本当にうまい。食事の合間に交わす熱帯林の話も、お互に林業関係者であるだけに、全く打ちとけて十年の知己同志が語りあっているようだ。木を植えるということは、こんなに人の心を和やかにしてくれるものか。いやいや、それだけではあるまい。はるばる日本から来て、一緒に汗を流して苗木を植えてくれたということに対するサバの人達の感謝の気持ちがそうさせるのだろう。

また、参加した日本の林業関係者同志が交わす「日本の森林官は大したものだ。このような僻地において森林造成に献身的に努力している。」「われわれも南洋材を利用しているのだから、森林復元にはもっと協力すべきだなあ」という言葉が私の耳に入る。また、参加者の皆さんが口を揃えて、「このような植林の旅を毎年企画してほしい。できれば来年も参加したい」という要望も出てきた。この発言は、この植林の旅が成功したことを物語っているが、この陰には、国井リーダーをはじめ、JICA プロジェクトの人達の力に負う所が大きい。感謝のほかない。

翌日は、典型的な熱帯雨林を視察するため、サンダカンに飛んだ。飛行機から見下すと、確かによく伐ったなあと思われる山なみが続く。森林造成への旅は果てしない旅となるのであろうが、緑の地球経営の実現を目指して、着実に一步、一步進めていくしかあるまい。そして、広く日本の国民の皆さんに、国際林業協力の重要性を理解してもらうためにも、今後とも東南アジアの国々に、植林の旅を続けていくことが大切だと、自分に言い聞かせながら、旅を続けた。